

「施設（事業所）内で、高齢者虐待防止に向けた取組を行う際に工夫していること」の取りまとめ

チェックリストやアンケートの活用	・ 年2回、虐待の芽チェックリストを実施し、前回の結果と比較している。また、2か月毎に、チェックリストの項目の1つに重点を置き、意識して対応している。 ・ 職員を対象に、日々の気になる声かけに関してアンケート調査を実施し、気になる声かけについては、職員の中で良い言い換えの言葉を考え、実践している。 ・ 無記名式アンケートを行い、本音で回答しやすいようにしている。 ・ 毎年社内研修を行い、アンケートによる聴き取りを行う。 ・ 虐待の芽チェックリストを3か月に1回、全職員に実施し、集計結果で把握した問題の解決に向けて、取り組んでいる。
虐待防止委員会の取組	・ 高齢者虐待の話をする、自分ごととして捉えず、他人ごとになることがある。そのため、ユニット内の困りごとを確認し、それらを通して委員会で検討するようにしている。 ・ 委員会のメンバーで情報共有ノートを作っている。シフトでメンバーが集まるのが難しいこともあるためそれぞれ感じたことを記入し、定例会議での議題にしている。議事は全体に周知している。 ・ 虐待防止委員会で虐待になる行為や今後虐待になりそうなケースがないかを確認している。 ・ 法人内の他部署と合同で委員会や会議を開催しており、多様な視点から虐待に関する意見を得ている。
チームアプローチに向けた取組	・ 入居者（利用者）の拒否に対して、なぜ拒否を受けるのか立ち止まり、会議等で事例として取り上げて全体で考えるようにしている。 ・ 職員のアンガーマネジメントや不適切ケアについて話し合う時には、個人が特定されないよう配慮している。 ・ ケアを行う中で、上手く対応できた事例を共有し、全職員が同じ対応ができるように努める。 ・ ケアを行う中で困りごとや入所者（利用者）の状態が変化した時は話し合いを行い、家族を含めて検討している。 ・ 施設全体のこととして捉えてもらうよう、あえてスタッフミーティング等の皆が集まる場で話をするようにしています。 ・ 一人で抱え込まず、年齢や役職関係なく周りの職員同士でコミュニケーションを行う。一人で判断せず、二人以上で検討するようにしている。 ・ 業務の流れが速いことが必ずしもよいことではないことを説明し、業務の進捗が遅れた場合は全体でカバーするようにしている。また、対応困難事案については、管理者に連絡し、状況によっては応援に行くようにしている。
研修の工夫	・ 業務に負担なく参加できるよう、研修時間は30分位とし、一回の研修内容の項目も少なくしている。 ・ 言葉遣いに関する教育を行っている。虐待の芽チェックリストを活用して、職員が発した何気ない言葉がスピーチロックにつながるかもしれないことを意識させている。 ・ 研修、伝達事項について検印欄を設け全員が確認しているか把握する。
職場環境について	・ センサーマットやベッド柵の位置等、見直せる箇所はないか、入所者（利用者）にとってよい環境であるか等を検討している。 ・ 管理者が不定期に巡回を行い、職場環境の確認を行う。気になる点については、その場で助言し、職員とも情報交換を行い、利用者の特徴に合わせた介護がしやすくなるようにしている。 ・ 職員の負担の軽減や職員同士動きが分かるようにするため、夜間帯の巡回は2人対応にしている。